

ハルハ・モンゴル語の instrumental 機能について

島崎 淳彦

1. 各方言の instrumental suffix

モンゴル語一般の morphologic system は、比較的保守的で、現代でも古い形をより多く残している。しかし、時代によって、又、各方言によって相当な相違を見出し得る部分もある。例えば、accusative と genitive は、Written Mongolian や Middle Mongolian では、部分的にしか区別されていないのに、Khalkha 語や Kalmuck 語に於いては、よく区別されている。Dagur 語や Monguor 語では、完全に同一視されている。又、複数形は各方言によって大いに違う。instrumental に於いても、同様な事がいえると思われる。一般に instrumental suffix は、-ār(-er, -ōr, -ōr)で表わされる。

Written Mongolian の場合は、-bar, -ijar, -igar, -ibar, -gar である。

これは、vowel の後では、-bar,

consonant の後では、-ijar, -igar, -ibar

adverbal suffix では、-gar

と分類できる。

Pre-classical Written Mongolian では、しばしば、-gsabar という suffix が使用された。これは、(継続副動詞 suffix) -gsan+(instrumental suffix) -gar である。

この suffix は、起源的には再帰的 suffix と関係があつて、Tungus 語のそれと対応させて考えると、はっきりする。

Tungus 語で人称代名詞の genitive は、単数では -wi(私の、あなたの、彼の)で、複数では -wer(我々の、あなた達の、彼らの)である。これは、再帰的 suffix -men〔複数の場合は -mer〕(…自身)より特殊変化した形である。そして、Tungus 語では、前舌母音 -e は、奥舌母音 -a に変化する傾向があるし、m音はw音に軟化する傾向がある。この音韻変化の類似性は、モンゴル語 instrumental にも根底に存在すると考えられる。だから、-bar, -gar, -ijar は、古形 -war より由来し、-ber, -ger, -ijer は、-wer より変化したものと考えられる。そして、-wer は、この中で最も古い形だと考えられるのである。Middle Mongolian を表わす文献の一つである hp'ags-pa script に於いては、instrumental suffix は、-'ar 及び -ijar である。元朝秘史に於いては、-'ar, -gar, -bar (-Bar), -ba'ar, 及び -ijar である。Mukaddimat 辞典に於いては、-ar, -ēr, -i'ar, -i'ēr である。このように Middle Mongolian には、文献によってその形は少しずつ違うが、本源的には vowel harmony の法則通りであった事は、間違いないようだ。それに -gar は、副詞に使用されたという事は先に述べた通りである。

(例) qotulagar (到るところ)

gagčagar (ただ独り)

方形字では、-ar, -gar は、単に化石的な形態で存在するだけである。これに反して元朝秘史では、上述のように、これらの形態は多数あらわれている。これは、モンゴル語の instrumental は他の suffix から派生的におこったという推論を可能にするのである。

例えば、instrumental suffix -ima'ari, -imagari の後の -i は、所有代名詞語尾の化石化したものであると考える。「これはトルコ語 benim(私の)が、ben(私)+-m〔所有語尾〕となっている事と対応する。」そして、この -i は三人称単数の独立した人称代名詞であったのが、現代語ではどこの方言でも消滅してしまっていると考えるのである。唯、一地方の Dagur 語に ir(彼)という形で保存されているにすぎないのである。Written Mongolian では、

genitive の -inu (彼の) と dative-locative の -imadur (彼に) が、残存している。元朝秘史では、-imada(彼に)、-imayi(彼を)と先に述べた -ima'ari (彼により)の形が残っているのである。又 genitive の元朝秘史での形態は、-ino であるが、これは単に名詞の後に用いられるのみならず、名詞の前にも用いられる。その事は、これが本来は独立した代名詞であった事を繰り返して示しているのである。更に三人称複数が規則的に対応する代名詞は -a であり、その genitive は anu (彼らの) である。これも元朝秘史では独立し、単に名詞の後のみならず前にも来ている。

次に各方言の instrumental suffix を示してみると次の様になる。

Monguor 語 : -ra, -ār

Urdus 語 : -ar, -ēr, -or, ṡr

Khalkha 語, Buriat 語 : -ar, -ēr, -ōr

Kalmuck 語 : -ār, -ēr

Mogol 語 : -ār, -ār

ところで Khalkha 語と Buriat 語には、Middle Mongolian の時代に、二つの instrumental suffix があった。一つは n 音を保持する場合で、他方は保持しない場合である。

n 音を保持する例 : morinōr (馬と一緒に)

n 音を脱落する例 : moriōr (馬によって)

前者は comitative として機能し、後者は普通の instrumental の機能を有していた。この comitative suffix と instrumental suffix の複合形式は、Preclassical Written Mongolian の頃から、現われている。

(例) qatunlugabar (女王と一緒に)

これは、(comitative suffix)-luga+(instrumental suffix)-bar の複合形式である。

この suffix -luga は、West Buriat 語の代名詞変化 suffix -lār と関係がある。

(例) namalār (私と共に)

しかし、Old Buriat 語では、shamanistic song や叙事詩の中で、全ての語形変化の中に見られる suffix である。

Khalkha 語に於いては、-lar は successive converb suffix -xplār の中に主に現われる。Kalmuck 語や Urdu 語では、possessive declension の中に現われる。Mukaddimat 辞典でも、この suffix は存在するが、instrumental と comitative の複合形式として現われる。しかし、上述の comitative + instrumental の複合とは順序が逆になっている事は注目される。

(例)

usuni'ārlā (水と共に)

hoduni'ārlā (星と共に)

nādunārlā (遊びと共に、慰みに)

以上の事から、モンゴル語一般に於いては、comitative と instrumental とは、本源的に密接な関係がある事が推測できる。comitative suffix -luga は、多分、複合 suffix だと思われるが、一般的音韻法則によると、Modern Mongolian の -lō に一致するのである。しかし、各方言で語形変化の一部の役割を果すようになると、comitative として機能するようになり、類推的に suffix -lā, -lē と共に全ての格形に現われるようになったと思われる。Khalkha 語及び Dagur 語では、-luga やその発展した形は、comitative としては用いられていない。comitative としては別に -tai, -tei という suffix がある。これは名詞の複数を現わす suffix -tan から派生的に発生した suffix だと考えられるが、近代から現代にかけ、古い形の comitative suffix -luga と置き換わる傾向にある。この現象は各方言について云い得る事である。Classical Written Mongolian や Middle Mongolian の時代では、-tai は comitative suffix ではなかった。comitative として機能するようになったのは、多分、近代になってからだと思われる。もっとも元朝秘史に次のような例がある。

(例)

○ ……中忽舌兒班 那可舌兒禿 你刊 古送兀……宜 荅兀勒周

(…… 3人の友と共に、その第1人を連れて)

○ ……秣驪禿 亦列罷一者

(……馬で来たのです。)

この事は、comitative 的機能が全然なかったという訳ではない事を示している。しかし、少なかった事は事実である。この suffix は、名詞に付加して、一種の形容詞として機能するのが大部分である。しかも敘述的な形容詞機能よりも限定的なそれとして使用されている方が多い。この事は、現代 Khalkha 語についても云い得る事である。しかし、元朝秘史に於けるそれと現代 Khalkha 語のそれとの違いは、次の様に云える。即ち前者は、具象名詞に付加するのが多いのに対して、後者は、抽象名詞につく場合が多い事と、comitative として機能しているのが大変に多い事である。

instrumental と comitative との関連性は重要な問題を含むが、本題とは離れるので、後に又、稿を改めて論ずる事とする。

2. instrumental suffix の分類

現代 Khalkha 語の instrumental suffix は、3種類に分類される。しかし、これは機能的分類ではなくて正書法的分類にすぎない。尚、以下の suffix 語彙、例文などの表記法は、Khalkha 語が共通語になりつつあるモンゴル人民共和国のそれに従い、ロシア文字を使用する事とする。又、例文はモンゴル人作家、著者による文学書、論文、及び政府機関紙《УНЭН》などから収録したものである。

- (1) -аар, -ээр, -оор, -өөр
- (2) -гаар, -гээр, -гоор, -гөөр
- (3) -иар, -иор

(1)は語尾音が、и 以外の短母音に終る語幹と隠れた г を持つ h 及び ь 以外の子音に終る語幹に付加される。

(2)は語尾音が長母音、二重母音、及び隠れた г を持つ h に終る語幹に付加される。

(3)は語幹が и 及び ь に終る場合、その語幹に付加される。

(例)

- (1) хөрөнгө (資本) → хөрөнгөөр
сүх (斧) → сүхээр
мод(он) (木) → модоор
ам (口) → амаар
- (2) дөрөө(н) (鐙) → дөрөөгөөр
сэхээ (意識) → сэхээгээр
шохой (白墨) → шохойгоор
байшин(г) (建物) → байшингаар
- (3) тамхи (煙草) → тамхиар
морь (馬) → мориор

前述のように、instrumental suffix は形態的に多大の変化を経て来た。形態の変化と共に機能上、又意義上にも変動が加わって来たものと思われる。以前には存在しなかった機能が優勢になる場合もあるだろうし、逆に一般的であった機能が失われて、派生的な意義に変化する事も考えられる。本稿では、現代 Khalkha 語を中心として機能的考察を試みようと思う。具体的例証に基づいて考察する為に既存の見解には出来るだけ拘束されないで論を進める事にする。分類が繁雑になるのを避ける為に instrumental suffix の接尾する品詞によって、大きく3種類に分ける事にする。

[I] 名詞、動詞、形容詞などに接尾する場合

[II] 動詞(的なもの)にだけ接尾する場合

[III] 名詞にだけ接尾する場合

以下、順を追って検討していく事にする。

〔I〕 名詞、動詞、形容詞などに接尾する場合

(1) 経 由

(イ) 経由する主体が、視線、光などのように人目では無形又は、無形に近いものと考えられる場合で、この場合には、「～を通して」、「～を隔てて」という意味内容として機能する。

(例)

◦ Ганц од үүний цоорхойгоор чичирхийн жирвэлзэж байв.

(たった一つの星が、雲の隙間を通して震えるようにきらめいていた。)

◦ Хашааны завсраар харагдаж байгаа шилэн цонхтой хийлэхийн хоосн танхимыг.....

(庭の間から見えているガラス窓の空いた教室を.....)

◦ Тэгтэл, цонхоор хойноос нь нэг хүн.....

(その時、窓の後から1人の人が.....)

この様に日本語訳は、「～から」が妥当であるがこれでは ablative と混乱する可能性がある。そこで、両者を比較検討してみよう。

(例)

◦ Тасралтгүй шуугилдаж байхыг би байшингаасаа харж гайхаж байв.

(絶えず騒ぎ合っているのを私は建物から見て驚いていた。)

◦ Баабая багш.....маргаашийн ажилдаа орохоор эх орныхоо нийслэлээс буцсан юм.

(バーバー先生は、.....明日の仕事に就く為に祖国の首府から帰ったのです。)

この様に混乱の起るのは、ablative の中でも「起点」を示す場合である。しかし、ここで問題にしている instrumental は、「介在物を通して」という

概念を有し、両者は明らかに異なる事がわかる。即ち *ablative* の場合は、「起点」に重点があり、*instrumental* の場合は、「介在物」に表現の重点が存するからである。「起点」を更に明確にする場合には、例文の如く、байшингаасаа *ablative+accusative* の複合形式を用いる。

(ロ) 経由する主体が、動物（特に人間）や車などの場合で、「～を通過して」、「～を経て」の意味を有する。

(例)

◦ Том тэрэг тосгоны баруун хаалгаар орлоо.

(大きな荷馬車が村の西門を入った。)

◦ Тэрэг нь бас тэгш цагаан замаар өчүүхэн донсолгоогүй урагшлан явж байлаа.

(荷馬車は、又、平らな白い道を少しも揺れない様に進行して行った。)

◦ Энэ гудамжаар шууд яваад.....

(この通りを真直ぐ行き.....)

◦ Нямаа тэр хүүхний хажуутаар өнгөрөхдөө найман цагт.....

(ニャマーは、その娘のそばを通りすぎる時に.....)

◦ Бид энэ гүүрээр гарч, тэр уулан дээрэх саравчинд очьё.

(我々はこの橋を渡って、あの山の上にある小屋へ行こう。)

◦ Тосгоны урьдахь гувгэр дээгүүр давсан замаар нааш цааш машин давхилдан,.....

(村の南にある小山を越える道を、あちこち自動車が走り、.....)

以上の例の場合は、「～を」と訳するのが妥当と思うが、*accusative* の場合の「～を」との区別はどの様にするかという問題が惹起する。これは、*accusative* の場合は支配する動詞が他動詞であるのに対し、*instrumental* の支配する動詞は、大部分、自動詞であるという事で大体、説明がつくと思われる。

(2) 材料, 原料

(例)

- Гүүний сүүгээр айраг хийж уураг байв.
(牝馬の乳で, 馬乳酒を作り飲んでいた。)
- Хөх тоосгоор барьсан өндөр хэрмийн гадна талд.....
(青レンガで築いた高い壁の外側には……)

(3) 手段, 媒介

(例)

-реформын бригад, тэргээр тосгонд орж ирснийг үзээд.....
(……改革班が車で村に入って来たのを見て……)
- Та нар асуудаг байвал ямар хэлээр асуух вэ ?
(あなた達は, 質問があれば何語でしますか。)
- Эндээс Москватай утсаар яриж болох уу ?
(ここからモスクワと電話で話すことが出来ますか。)
- Уурхайч гэдэг нэг үгээр хэлэхэд өөр ертөнцөд очиж ажилладаг хүмүүс.
(坑夫とは一言で云えば, 他の世界に行って働く人々の事である。)
- Газраа юугаар борддог вэ ?
(土地には, どんな肥料を施しますか。)
- Сонгууль явуулах журмыг тусгай дүрмээр тогтооно.
(選挙執行規則を別則に定める。)
-Ардын Их Хурлаас доорхи бүрэлдэхүүнээр байгуулна.
(……人民大ホラルは, 下記の構成員で, 構成する。)
- Ардын Их Хурлын чуулганд дараа оруулан батлуулахаар яамд,өөрлөх ажлыг эрхэлнэ.
(人民大ホラルの会議で, 事後承認による各省は, 改組する仕事を
取り扱う。)

- Хань Лао-лю ингэж хэлээд бауун гараараа зангаж.....
(ハン・リャオ・リューは、この様について右手で合図して……)
- шар шороогоор шавардаан байшингийн дээвэр
(黄土で汚れた建物の屋根)

この(2)(3)の例は、instrumental としては、典型的な用法で、Classical Mongolian の時代から使われているものである。

(4) 引用

(例)

- Рашид-ад-Дины мэдээгээр нэг хүрээнд мянгаад өрх багтдаг байжээ.
(ラシッド・エディンの報告によると、一つのフレーに約千戸含まれているのであった。)
- Түүний үгээр бол,ан гөрөө хийдэг байжээ.
(彼の言によると、……は、狩猟していた。)

(4)は現代 Khalkha 語特有の用法で、以前には見られなかったし、各方言では現代でもあまり見られないものである。Khalkha 語に於いては最近では副文章形成の suffix のように使われている。即ち、後置詞 хойно, хойш, дараа, өмнө と同じ様な位置をしめるようになっている。そして、例文の後者では болをとる事によって、一種の nominative として機能している。instrumental 的機能を離れて、nominative 機能に近づきつつあると見るべきである。格の浮動性を表わす例である。

(5) 副詞的に

品詞の区分は、どの言語に於いても窮極は、便宜的な妥協であるが、モンゴル語に於いては、特にその傾向が強い。所謂、実詞として扱った方が便利だと思われる語彙が非常に多いのである。最も品詞性の高い名詞、動詞でさえ、時には、その機能を失う事である。特に instrumental suffix や ablative suffix が接尾して副詞化する場合は、それが顕著である。副詞というものは、

どんな品詞でもなれる可能性があるものだから、モンゴル語に於いても、純粹な副詞というものは存在しない。しかし instrumental suffix や ablative suffix は、これが接尾したいかなる品詞をも副詞化し得る要素である事は確実である。機能的に副詞を概観すると、次の様に分類出来る。

(i) 時を示すもの

(例)

| | |
|----------------|---------------------|
| өнөөдөр (今 日) | маргааш (明 日) |
| өцөгдөр (昨 日) | хэзээ, хэдүид (何 時) |
| нэгэнт (す で に) | хэзээд (常 に) |
| хэзээний (以 前) | |

(ii) 場所を示すもの

(例)

| | |
|-----------------|-----------------|
| хаана (ど こ に) | наана (こちら側に) |
| хойно (後 に) | өмнө (前 に) |
| цааш (向こうへ) | доош (下 へ) |
| дээгүүр (上 部 に) | хойгуур (後 側 へ) |

尚、起源的には -уур (-үүр) は, instrumental suffix である。

| | |
|----------------|---------------|
| тэндээс (そこから) | эндээс (ここから) |
|----------------|---------------|

(iii) 程度を示すもの

| | |
|---------------|----------------|
| маш (非 常 に) | асар (極 め て) |
| хамгийн (最 も) | туйлын (非 常 に) |

(iv) 上の分類に属さないもの

ここに属するものの中には、上述のものと重複するものもあるが, instrumental suffix を共有するものとして、同じグループに分類する。

(例)

| | |
|---------------|----------------|
| багаар (少 し) | орноор (多 く) |
| сэмээр (静 かに) | нууцаар (秘 かに) |

| | |
|-----------------|-------------------|
| хурднаас (速やかに) | түргэнээр (急速に) |
| өндрөөр (高く) | сайнаар (立派に) |
| хавтгар (平らに) | бүжгир (髪が縮れたままで) |

事物の状態、性質を表わす形容詞又は、副詞に instrumental suffix を接尾すると、その意義内容は、一層、明確になる。だから、この suffix がなくても意義内容はあまり変わらない。唯 comitative suffix -тай (-тэй, -той) や否定の意味を表わす suffix -гүй と共に使用される時は、instrumental suffix がないと、意味がはっきりしない場合がある。それで、

- (i) suffix -тай (-тэй, -той) か, -гүй を含む場合
- (ii) この suffix を含まない場合

の二つに分類する。

- (i) suffix -тай か -гүй を含む場合

(例)

◦ Тэгээд шал онды нэг зүйлийг шүүрэн авч түүний их бодолтойгоор асуусан.

(そうして、全く別の一つの事を取り上げて、彼女はよく考えてたずねた。)

◦ Тэр үлдсэн хэсэгхэн өгүүлбэрийг шуналтайгаар уншиж эхлэв.
(彼は残りの一連の文をむさぼる様に読んだ。)

◦ Мичурин нэг ч номыг уншилгүйгээр өнгөрдөггүй байв.
(ミチューリンは、1冊の本をも読まないですごす事はなかった。)

◦эдийн засгийн хөгжилгүйгээр энэ тайван байж болохгүй.
(……経済の発展なくして、平和はあり得ない。)

◦пркурорын зөвшөөрөлгүйгээр хэнийг ч баривчилж ул болно.

(……検事の許可なしには、誰をも逮捕する事は出来ない。)

(ロ) その他の場合

(例)

- Энэ жүжгийн эхний үзэгдэл нь Нямаагийн сэтгэлийг улам ширүүнээр догдуулав.

(この劇の最初の舞台は、ニャマーの心を更に激しく打った。)

-тэднийг эелдгээр инээмсэглэн харж байгаа тэргэн дээрх хүмүүсийг сонирхон харцгаана.

(……彼等にやさしく微笑して見ている車上の人々を興味深げに見ています。)

- Шинээр байгуулж байгаа их уурхайи.....

(新たに建設している大鉱山の……)

-нуудлийн арга алгуурхнаар задарч,.....

(……遊牧の方式は、次第に解体し、……)

- Өвгөн Сунь инээгээд.....гэж аажмаар өчив.

(ソン爺さんは、笑って……とゆっくりと云った。)

- Ганбат энэ тасалгаанд ганцаараа байга юм сайж.

(ガンバットは、この部屋に1人で残っているのです。)

[II] 動詞 (的なもの) にだけ接尾する場合

形動詞形や副動詞形に instrumental suffix を接尾すると、色々な意味、機能が発揮される。即ち、「～する為に」、「～する様に」、「～する事に」、「～するよりは」、「～しつつ」、「～しながら」、「～して以来」、「～した結果」などである。

以下、同じ意味グループ毎に類別して、例文を挙げる事にする。

(6) 目的

「～する為に」、「～する様に」の意味を有する。

(例)

-найман оюутан англичан суролцахаар очно.

(……8人学生がイギリスに留学します。)

- Ганбат нөхдөө бүрэн гарч амжсаны дараа, өөрөө гарахаар гүйв.

(ガンバットは友人達が完全に出てしまってから、自分も出る為に走った。)

- ……дөрвөн мянган хүн тутмаас нэг дэчутат байхаар бодож сонгуулын тойргууд байгуулаж……

(……4千人について1人の議員がいる様に計算して……)

- Оролт сүлжихээр улайж……

(首巻を編むのに一生懸命になって……)

- Малаа онц сайн оруулахаар дулаан хашаа бэлтгэх хэрэгтэй.

(自分の家畜が特によく入るように 暖い小屋を準備しなければなりません。)

- Бид хоёр энэ газар хоноглохоор шийдэв.

(我々2人は、この土地で宿泊する事に決めた。)

(7) 比較

instrumental の比較用法は、特殊用法である。普通、比較には ablative を用いる。例文は教訓的意味を含んだ諺が多い。

- Нэр хугарахаар, яс хугарсан нь дээр.

(名前を汚がすよりは、骨が折れた方がよい。)

- Нулимс унагахаар нудрага зангидах.

(涙を流すより拳を握りしめる。)

- Зүүн төгрөгтэй явахаар зуун хөрөхтэй яв.

(百トグロック持って行くよりは、百人の友と行け。)

- Мүү амьд явахаар сайн үхэх.

(悪い生活を送るよりは、立派に死ぬ。)

- Хүний дураар тос уухаар өөрийн эрхээр ус уу.

(人の愛で油を飲むよりは、自分の権利で水を飲め。)

(8) 同意, 一致

「～の通りに」, 「～の様に」の意味を有する。但し(6)(8)は、意味の上で類別しにくい場合もある。

(例)

◦ Гэтэл сурагч Дорж, Тэмэр нар саналаараа барилгын сургуульд хуваарилагдсан юм.

(しかし、生徒のドルジ、トムル達は、自分達の考え通り、建築学校に進学した。)

◦ Барарч хэдэн өдрийн турш Дэндэвийн зааснаар трактораа асааж.....

(バララチは、数日の間にデンデブが教えた様に、トラクターに点火し.....)

◦ Таны сануулснаар түргэн харьж унтъя.

(あなたが警告した様に早く帰って寝よう。)

(9) 原因, 結果

「～した結果」, 「～の理由で」の意味を有する。

(例)

◦ Дулаан хашаа бэлтгэснээр малаа онц сайн оруулав.

(暖かい小屋を準備した結果、家畜は特によく入った。)

◦ Хувьсгалт уралдааныг өргөнөөр дэлгэрүүлснээр төлөвлөгөө хугацаанаас өмнө биелүүлэв.

(革命的な競争が広汎に展開された結果、計画を期間よりも前に実現した。)

◦тосгон уулга дээрэмд дайрагдсанаар нэг ч өрхөд идэх будаа, өмсөх хувцас, хөнжил дэвсгэр зэрэг юд ч үлдээсэйгүй,.....

(.....村一帯が強盗に襲われた結果、食料、衣料、寝具など何もとられ

なかったのは1軒だになく、……)

- Цүлтэм Ирмаа хоёр энэ айлын зарц болсны далимаар дотно танилцаж амрагласан боловч,……

(チュルテムとイルマーの2人は、この村の使用人になったのがもとで、親しくなって愛する様になったけれども、……)

原因、理由を表現する用法は、instrumental 以外にいくつかある。即ち учир (又は、ablative suffix を接尾して учраас)、тул などの接続詞を使う方法である。現代語では、どちらの接続詞も盛んに使われているが、instrumental suffix を使って原因、理由を表わす用法は、болохоор を除いて衰えつつあると思われる。文章構造を明確にして、意味内容をよりはっきりさす事は、どの言語でも重要な事だが、Khalkha 現代語でも最近その傾向が見られる様だ。その一つの表われが、この現象である。以下、参考の為に、болохоор、тул、учир、及び ablative を使って、理由を表現する例文を示す事にする。

(例)

- Цамайг надтай ярих юм олохгүй болохоор зүгээр асууж байна гэж Нямаа хэлэв.

(あなたが私と話す事がないので、それで聞いているのですとニャマーは云った。)

- Тариа Люеных тур Люены тариагаа эгүүлэн авах гэхэд,……

(畑はリュエンのものだから、リュエンが自分の畑を取りもどそうとなさるのに……)

- ……гурван жил адуулахаас нэг ч ишиг чонод өгсөн түүхгүй учир Сүрэнд магтагддаг байсан.

(……を3年放牧してから1匹の子山羊も狼に喰われた事がないので、スルンにほめられていた。)

- Ан гөрөө хийдэг газар нутгаас болж, эдгээр аймгууд байн

байн тулалцдаг байлаа.

(狩猟を行う地方の為に、これらの部族は絶えず戦っていた。)

-ажил болгож чадахгүйгээс тэр туршлагыг гутаахад хүрдэг явдлыг эцэс болгох хэрэгтэй гэв.

(……仕事をする事が出来ない為に、その経験を辱しめる様な事は、止めなければならないといった。)

(10) 継 続

「～しつつ」、「～しながら」という意味の他に、「～して以来」と訳してよい場合もある。

(例)

- Токиод суусаар гучин жил болжээ.

(東京に住むようになって30年たった。)

- Төрсөөр ийм юм үзээгүй.

(生まれて以来このようなものを見た事はない。)

- Манай дээд сургууль байгуулагдсаар хэдэн жил болов ?

(我々の上級学校は、建てられて何年になりますか。)

- Та ямар хэлийг сурсаар байна уу ?

(あなたは、どんな言語を学びつつあるのですか。)

この他、よく用いられる動詞を示すと次の様になる。

явсаар (行きつつ) тоолсоор (数えつつ)

нүүсээр (移りつつ) үзсээр (見つつ)

(11) 可 能

「～する事が出来る」、「～の可能性がある」という意味を有する。

(例)

- Энэ замаар явмаар байна.

(この道に沿って行く事が出来る。)

◦ Үүнд арга хэмжээ авмаар байна.

(この手段を取る事が出来る。)

◦ Бороо ормоор байна.

(雨が降る可能性がある。)

[Ⅲ] 名詞にだけ接尾する場合

[Ⅰ][Ⅱ]と同じように同じ意味グループ毎に類別して例文を挙げる事とする。

(12) 漠然とした地域, 散在

場所, 地域を表わす名詞に接尾して, 「漠然と存在する」, 「散在する」, 「あちらこちらにある」という意味を有する。場所を表わす用法には, dative-locative があるが, これは場所といっても, どちらかと云えば点を表わすのに対して, instrumental の方は, 地域を表現するのが特徴的である。

(例)

◦ Одоогийн Байгалын зүүн эмгээдээр..... гэдэг аймаг нутаглаж суужээ.

(現在のバイカル湖の東方に……という部族が居住していた。)

◦ Онон мөрний хөндийгөөр жалайр гэж хүн бүл нилээд олонтой, хэчирхэг аймаг байжээ.

(オノン河の流域に札刺亦兒といつて, 人数が可成り多い, 強力な部族がいた。)

◦ Тэд ууланд газраар сууж байна.

(彼等は, 山の中のあちこちに住んでいます。)

◦ Хүүхэд нар замаар наадж байна.

(子供達が道端で遊んでいます。)

(13) 数量

instrumental suffix が, 数量と関係する語彙に接尾している例は, Mid-

dle Mongolian の文献にも現われている。多分、Classical Mongolian 時代から、この用法は存在していたと思われる。北トルコ語の方言に、モンゴル語から借用したと思われる痕跡が、数詞の用法に残っている。起源的にみると、数詞に instrumental suffix をつけるようになったのは、類推によるようだ。トルコ語 : alty(六), jedi(七) に suffix -lar, -lär をつけるのは, ikilar(第二)の類推による。モンゴル語に於いても、多分、同じような起源であろうと想像される。現代 Khalkha 語に於いては、基本数詞に -дугаар(-дүгээр) という suffix をつけて順序数詞をつくる。現在では、-дугаар は suffix だけではなくて、「番号」という意味の名詞にもなっている。又、これは、「約…」という意味を持つ他に、数量と関係のある名詞に接尾して、「期間」を表わしている。ここでは、その2種類ともう一つ「集団の単位」に分類する。

即ち (i) 概略数量, (ii) 期間, (iii) 集団の単位である。

(i) 概略の数量

(例)

◦ ……, монгол угсаатан бүрэлдсэн нь 13 зууны эхээр болжээ.

(……, モンゴル部族が形成されたのは, 13世紀初頭の頃であった。)

◦ ……хэдөлмөрчид малаа 1962 онд 232 мянгаар өсгөн……

(……の勤労者達は, 家畜を1962年には, 約23万2千(頭)繁殖させ……)

「約…」とか「…位」という意味の suffix は、この他に -аад (-оод, -өөд, -ээд) がある。

(例)

◦ Үүний 70 гаруй хувийг тус хотын хөдөлмөрчид сүүлийн арваад жил суулгажээ.

(その70パーセント余を, この市の勤労者達が, 最近約10年間に植えた。)

◦ ……400-гаад бухал хийсэн.

(……約400の干草を作った。)

(ロ) 期間

(例)

- Ардын Их Хурлыг гурван жилийн хугацаагаар сонгоно.

(人民大ホラルを3年の任期で選出する。)

- Тэгвэл би хагас жилээр захиалья.

(それならば、私は半年の予約をしましょう。)

(ハ) 集団の単位

(例)

- Адуу мал, сүрэг сүргээрээ тосгоноос гарч, билчээртээ одно.

(家畜が群をなして村から出て、自分の牧場に行きます。)

- Тэр үе хүртэл монголчууд салангид аймаг нэгдлээр суужээ.

(その時代までモンゴル人達は、個別の部落や部落連合毎に住んでいた。)

- Үйинхүү монголчуудын хүрээгээр нүүдэллэх мал аж ахуйн нүүдлийн арга алгуурхнаар зарарч, оронд нь овгоор бус айлаар нүүдэллэх нь улам улам илүү болж ирлээ.

(この様にして、モンゴル人達のフレー毎に遊牧する遊牧経済方式は、次第に解体し、それに代って、氏族毎ではなく部落毎に遊牧することが、益々、多くなって来た。)

(14) 関係

「～に関して」, 「～に就いて」, 「～の面で」の意味を有する。

(例)

- ……таван хушуу малаа 2 сая хүргэж малын тоогоор улсын тэргүүн аймаг болбв.

(……5種の家畜を200万頭送り届け、家畜数では、この国最高のアイマクになった。)

- Монголын аймгууд нийгмийнхээ хөгжлийн талаар харилцан адилгүй ажээ.

(モンゴルの諸部族は、社会の発展の面で互いに同じではなかった。)

-үйл ажиллагааныхаа талаар.....
(……自分の活動する面で……)
-удирдах талаар.....
(……指導する面で……)
-харилцан бие биеэ хамгаалах талаар олон улсын гэрээгээр авсан уургээ.....
(……相互にそれぞれ防衛する面で、国際条約によって負った任務を……)

この用法では、талаар を用いた例が続出するが、同じような意味の用法で、「genetive suffix+тухай (～に関して)」が、他に存在する。

(例)

- Тэр ажилийн тухай сайн хийв. (彼は、仕事をよくやった。)

(15) 身分

資格、職業名に接尾して、「～として」、「～に」の意味を有し、身分、階級などを表現する。現代語特有の用法である。

(例)

- Мичурин, Ряжск гэдэг станцын орголч даргаар томилогджээ.
(ミチューリンは、リャジスクという駅の駅長代理として任命された。)
- Тэр анх удаа Козлов хотын төмөр замын станцын барааны конторт бичээчээр орж ажиллав.
(彼は、初めてコズロフ市の鉄道の駅の貨物取扱所に、書記として入って仕事した。)
-түүнийг элчээр томилов. (……彼を大使に任命した。)

これと同じような意味としての用法には、他に「genetive+хувьд (部分、運命)」がある。

(例)

- Би энэ захидал, хурал хоёрыг багшийн хувьд, эцгийн хувьд

баяртай хүлээн авч.....

(私は、この手紙及びホラルの両方を先生として、又、父として喜んで受けとり……)

(16) 主 語

nominative 的用法の場合である。

(例)

(イ) Тэрээр 1937 онд авьяас билэг, оюун ухааныхаа ид цэцэглэлтийн үед нас нөгцжээ.

(彼は1937年の才能と理智の旺盛な時期に死去した。)

(ロ) Алим нь өнгөөр улаан.

(りんごは、色が赤い。)

(ハ) Тэр хурлаар сонгосон толгойлогч байна.

(彼は、ホラルが選んだ議長であります。)

(ニ) Энэ жил, идэх амуу будаагаар ховордож мэднэ.

(今年は、食物が乏しくなるはずだ。)

このように instrumental が主語として機能する事もある。(イ)以外は、一種の二重主語的表現だと考える事が出来る。このような表現法は、トルコ系の言語や、朝鮮語にも存在する。しかし instrumental suffix での二重主語表現は、特殊なものだと思われる。(ロ)は、「ホラルが選んだ」という表現だが、「ホラルによって選ばれた」という意味である。ところが、この用法では、選ぶ主体が多数という概念を有する語彙でないと使用出来ない。即ち、この例では、「ホラルの人々によって選ばれた」という意味が含まれているのである。そして、「選ばれた」という意味なら、passive にするのが本来だが、このように active のままであるのも特徴的だと云えるだろう。そういう意味では、完全な意味での nominative ではない。

(ニ)は、ховордох (乏しくない) という動詞に着目する必要がある。他の言語にもある事だが、モンゴル語では、suffix によって慣習的に密接に係る

動詞, 名詞, 形容詞がある。instrumental suffix に於いても同様である。これらは、一種の格支配を受けるのである。だから、外見的に文の構造が異様であっても、潜在的に存在する格との密接な関係を考慮すれば、(二)の場合でもある程度、異和感は軽減されると思われる。文中では形態的異和感を越えて idiomatic に使用されているようだ。

instrumental suffix と密接な関係がある語彙には、ховордох (乏しくなる), үгүйрох (貧困に陥る), баян (金持の), элбэг (豊富な), などの「乏しさ」, 「豊かさ」を意味するものの他に次のような語彙がある。

| | | | |
|------------|----------|-----------|-----------|
| явах | (行く) | аялах | (遊行する) |
| жугуулчлах | (旅行する) | дамжуулах | (伝える) |
| хангах | (供給する) | шагнах | (賞を与える) |
| үл барам | (～のみならず) | барахгүй | (～ばかりでなく) |

以下、例文をあげる。

- , мөн сангийн аж ахуйгаар явсан юм.
(……及び、国营農場へ歩いていったのです。)
- Баруун хязгаараар 700 км аялахад,
(西の国境を7千キロ旅行した時、……)
- Би баруун хэдэн аймгаар нилээд хугацаагаар жуулчлаад иржээ.
(私は西のいくつかのアイマクを相当の期間、旅行して来ました。)
- Бид усаар хангах явдлаа бүрмөсөн зогсоох болно.
(私達は水を供給する事を絶対に停止するであろう。)
- Энэ зорилгоор Тэмжин, ноёд, нөхдөө өгөөмрөөр шагнаж,
(この目的でテムジンは、領主や盟友に多くの賞を与え、……)
- Энэ зан үйл гагцхүү эрт цагт байснаар үл барам, мөн дундад үед ч өмнөд монголд байсан.....
(この風習は、ただ古代にあったのみならず、又、中世にも南モンゴル

にあった……)

-зөвхөн цэцэрлэгээр барахгүй мөн нилээд алсыг ч харж болох юм байна.

(ただ公園ばかりでなく、非常に遠くを見る事が出来ます。)

- Монгол орон бол анчин, загасчдын дур татсан ан амьтнаар элбэг арвин орон байна.

(モンゴルは、狩猟家や漁夫の多い国であります。)

(17) その他

今までの分類のどれにも入らない用法である。

(例)

- Түүнийг ирэхээр нааш нь утсаар ярь.

(彼がもどって来たら、こちらに電話をかけろと云って下さい。)

- Надаар битгий оролд, замаа хөө.

(私に構わずに、自分の道を行け。)

-гишүүнтэйгээр сонгоно.

(……幹部会員と共に選ぶ。)

3. instrumental 以外の格 suffix の主語的表現

instrumental の nominative 的機能は、非常に特殊なものであると先に述べて来たが、instrumental 以外の genitive, dative-locative, accusative, ablative などにも nominative 的機能がある。それぞれの格が nominative 的機能を発揮する時でも、instrumental と同様、一定の条件が伴うものである。普通は、他の多くの言語でそうであるように、nominative には suffix をつけない。特に主語を強調したいとか、nominative としての意味が明確でないとか、或いは、主語が数語からなる句なり節である場合以外には、殊更 nominative 表示の suffix をつけない。nominative 表示の suffix には、

動詞 болох (成る) から派生した бол と genitive から派生した нь, чинь がある。これは他の格 suffix のように、関係する単語に連絡させないで、離して使用する。

(例)

- Тэр бол нэг хүүтэй ба нэг охинтой юм.
(彼は、1人の息子と1人の娘を持っている。)
- Модны ногоорон байх нь тун ч аятай байна。
(木が緑であるのは、全く気持がよい。)

次に他の格 suffix 使用の一定の条件を例文を示しながら説明する事にする。

(1) genitive と accusative の場合

(イ) 形容詞節 (句) に於ける主語は、必ず genitive である。

(例)

- Саяын миний ярьсан үгнүүдийг чи бүгдийг нь ойлгов уу ?
(今しがた私が話した事を全部理解しましたか。)
- Тэдний орж ирэх хаалга руу үргэлж тормолзон харсаар байв。
(彼が入って来るドアの方をいつも見ていました。)

(ロ) 名詞節が主語になる場合、その節の主語は、大部分 genitive である。

(例)

- Миний ийм янзаар явсан нь таныг баярлуулахаас ер гомтгохгүй。
(私が、こんな風に外出した事は、あなたを喜ばしこそすれ、悲します事ではない。)

(ハ) 名詞節が目的となる場合は、その節の主語は、大部分 genitive である。但し、場所を表わす副詞 (句) が挿入されると、大部分 accusative となる。

(例)

- Энэ хөгшин чоно чинь миний явах гэж байгааг шиншсн байна

шүү гэж бодлоо.

(この年とった狼は、私が行こうとしているのを嗅ぎつけているのだな
と思った。)

◦ Цамайг тосгоноос ирснийг би түүнээс дуулав.

(君が村から来たという事を私は、彼から聞いた。)

(二) 副詞節の場合は、suffix, 接続詞, 後置詞などで区別する。

(i) -хад, хаар に導かれる副詞節の主語は、大部分 accusative となる。

(ii) 後置詞 хойш(хойно) を含む副詞節の主語が主節の主語と異なる場
合, accusative を用いる。主語が同じ場合は、suffix なしである。

(iii) -тал, -тай зэрэг を含む副詞節の場合, accusative を用いる。

(iv) тул, учир, дараа, хэлв, -вч を含む副詞節の場合, 大部分 suffix
なしである。

(例—i)

◦ Өчигдөр намайг гэртээ юм үзэж байхад гэнэт тэр ирлээ.

(昨日、私が家で本を見ていると、突然、彼がやって来た。)

◦ Цамайг надтай ярих юм олохгүй болохоор зүгээр асууж байна。

(あなたが、私と話し合う題目を見つけ得ないので、たずねているので
す。)

(例—ii)

◦ Гомбыг үхсэнээс хойш хүн амьтан энд ойртохоо больжээ。

(ゴンボが亡くなってから、人も動物もここに近づかなくなってしまっ
た。)

◦ Нямаа нөхөртэйгөө сууснаас хойш байшиндаа ганцаараа сууж
өнгөрсөй байжээ。

(ニャマーは、夫と結婚してから、建物で1人で座っていたのでした。)

(例—iii)

◦ Намайг ой модны дундуур явж байтал бороо оров。

(私が森の中へ入って行くと、雨が降って来た。)

- Биднийг очихтой зэрэг галт тэрэг хөдөллөө.

(我々が行くとすぐに汽車が動いた。)

(例—iv)

- Одоо би тантай уулзсан тул хүсэл хамгагдав.

(今、私はあなたと会ったので望みが叶えられました。)

- Бэлтгэлийн тухай Мичурин мэдэж байсан учир энэ явдал нь түүний сэтгэлийг гүн их хөдөлгөв.

(ベルトゲルに関して、ミチューリンは知っていたので、この事は彼の心を大いに動かした。)

- Худалдаан тарсны дараа Раск сурвалжлагдад мэдэгдэхдээ:.....

(会議が終った後で、ラスクが記者達に知らせたのによると:.....)

- Хэрэв тийм алим байдаг бол түүнийг үеэж ургуулсан хүмүүсээс жимс боловсруулав аргыг урч авахыг эрмэлзэнэ.

(もし、その様なりんごがあるならば、それを見て、育てた人から果実を实らせる方法を、ちょっとでも学びたいと思った。)

- Хоёр ангахай галуун сүргээс хоцрохгүй ниссэн боловч ядрах нь хэцүү байлаа.

(2匹のつばめは、雁の群から後れずに飛んだけれども、疲れは激しかった。)

(2) dative-locative の場合

comitative suffix を伴った一部の形容詞が、敘述的に使用される時に用いられる。前述の instrumental suffix を伴った二重主語的表現〔cf. (16) 主語の(向), (ハ), p. 68〕と類似している。しかし、例文が少なく断定的に述べるのは、躊躇するが、ここに分類した dative-locative は人称代名詞に關与しているのに対し、instrumental の場合は、それ以外にも用いられているように

思われる。

(例)

◦ Би танд дуртай.

(私は、あなたが好きです。)

◦ Надад энэ ном сонирхолтой.

(私は、この本が面白い。)

(3) ablative の場合

団体、機関、多数の集団が主語になる場合が多い。

(例)

◦чуулганыг гүйцэтгэх захиргаанаас хийлгэнэ.

(……集会を執行機関が開く。)

◦тэргүүлэгчдээс зарлан хуралдуулна.

(……幹部会が招集し、開会する。)

◦улсаас удирдах.

(国が指導する。)

◦ Октябрийн социалист хувьсгал нь түмнээс явуулсан.

(社会主義革命は、人民が行なった。)

このように、現代 Khalkha 語では、形容詞的要素の強い comitative suffix 以外の格 suffix は、nominative 的機能を持っている事がわかる。逆に nominative は、格的機能の侵蝕を大きく受けている格であると云えるのである。即ち、nominative は、instrumental と共に、機能的ゆとりの大きい格であるように思われる。

4. 結 語

instrumental を中心にして、現代 Khalkha 語の格の機能を考察して来たが、ここでもう一度、分類項目のみを列举してみる事にする。

[I]

- (1) 経由
- (2) 材料, 原料
- (3) 手段, 媒介
- (4) 引用
- (5) 副詞

[II]

- (6) 目的
- (7) 比較
- (8) 同意, 一致
- (9) 原因, 結果
- (10) 継続
- (11) 可能

[III]

- (12) 地域, 散在
- (13) 数量
 - (イ) 概略の数量
 - (ロ) 期間
 - (ハ) 集団の単位
- (14) 関係
- (15) 身分
- (16) 主語
- (17) その他

この分類の仕方には、例文と項目が完全に一致しないものもあつたりして、色々と難点がある事は、認めざるを得ないところである。しかし、格機能の理解と分析に関しては意外に微妙な困難がある事は事実である。というのは、格の定義が一般的にはむずかしく、デンマークの言語学者イエルムスレウの云う

如く、格は単に二つの対象間の一つの関係を言語的に表現する範疇のみなのではないし、又、我々日本人が一般的に格の名称から受ける印象である格子や格天井の如く規則的に連らなつた拮がりといったものでもない。格は、有形であろうと無形であろうと又、顕在的であろうと潜在的であろうと、名詞と文の相関性の範疇であつて、文における名詞の機能に本質的なものである。名詞が文に働く時には必ず格がなくてはならぬし、それが名詞である事も、最終的には、文によって決定されなければならないのである。語彙の価値が完成するのも、実は文においてである。語彙と文の間には、このように無限にして流動的、しかも必然的な相関性が存在しているし、格機能は文全体と関連させて考察しなければならない宿命を持っていると云えるのである。ところで、この論述に於ける大枠として【Ⅰ】【Ⅱ】【Ⅲ】を設定し、名詞、動詞などの品詞によって類別を試みた。ところが現代 Khalkha 語の品詞の分類は、極めて明確性に乏しいもので、その点でも論理的矛盾を引き起し易い分類基準である事も承知の上での事である。しかし、格機能の問題に限らず、内的にしる外的にしる言語構造に関する枠組みの設定に於いては、どんなに合理的に又、どんなに十分な理解の下に広範囲に集めた資料を分類したとしても、常に不明確で割切れない不条理な部分が残るとされている。勿論、この分類が完全な合理性、十分な理解の下に行われたと主張出来る程は、精緻でない事も十分、承知しているところである。この事を念頭に於いて結論を云うと、現代 Khalkha 語の instrumental は、比較的多義性が強く、浮動性の大きい格だと云える。一部は、機能的に弱体化しつつあるだろうが、全体的にみると、機能の拮がりつつある格だと思われる。例えば、(4) 引用、(7) 比較、(15) 身分、(16) 主語、などの機能及び、形動詞、副動詞との関連性の強まりなどは、現代語に至って顕著になりつつあるように思われる。

ここで、instrumental と他の格機能との重複、競合、融合関係を示すと図 1 となるし、同様に nominative のそれを示すと、図 2 となる。尚、これらの図は、instrumental を中心として、又 nominative を中心として、他の

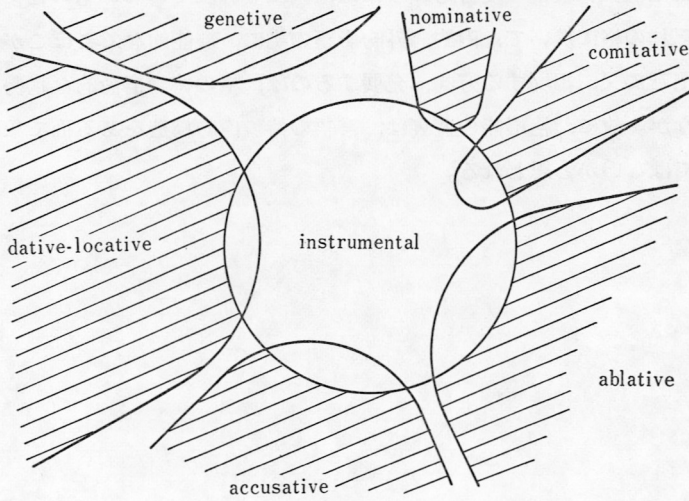


図 1

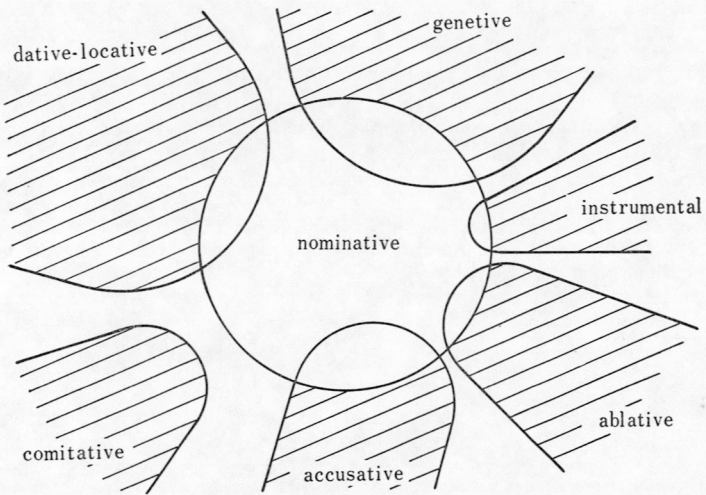


図 2

格機能との関係を図示したもので、他の格同士の関係は、考慮に入れていない

ものである。又、侵蝕の度合も顕著には、図に表われていないものとする。

それぞれの格に於いて、内的、外的影響の為に、機能的なでこぼこがあり、それが相互に又、相反する方向へ発展するのは、格の持つ宿命的な趨勢ではないだろうか。故に、格機能の盛衰は、言語の持つ内的構造をある面で象徴しているのではないかと思われる。